

## 英語教員が非英語教員に聞くフィールドワークの可能性

八戸工業大学 東方 悠平

秋田大学 畠山 研

英語教員である畠山が、非英語教員である東方の異文化理解の試みをたずね、多文化社会のありかたを考える機会とした。畠山の問いと東方の回答は以下のとおり。

\* \* \* \* \*

畠山「『異文化理解』というと、英語圏の国々や西洋社会を『異文化』として学ばせることが多い一方、世界にはもっと多様性があることを意識すべきとも思います。そこでアジア圏に詳しい東方先生からお話を聴きたいのですが、アーティストとしてどんな点に異文化理解があるとお考えですか？」

東方「芸術の分野でも同じことが言えると思います。一般的に『美術』や『美術史』と言われるとき、それは西洋美術で、ヨーロッパの歴史やキリスト教の文化を中心としたものを指しています。また、私たちもそういったものをイメージすると思います。一方、西欧中心史観から離れて、アジアやアフリカなどの価値観が参照される動きもあります。私もアジア圏のアーティストとして、自分の実践を相対的に捉えるようにしています。例えば、他の国のアーティストと会って話したり、作品を見せ合ったりする場合、芸術が媒介となって言葉以外にも多くの感覚が共有できます。他方、アーティストの社会的な役割や芸術大学などの教育システム、また芸術と宗教の関係など、異なる部分もたくさんあります。自分が当たり前だと考えているものが自明ではないと、さまざまな国のアーティストたちと関わる中で実感することが多いです。その場合、特に具体的な相手がいることも加わって、異文化を理解したり尊重したりしなければならないという感覚を強く持ちます。」



(ドイツで五年に一度開催される国際的な美術展、ドクメンタ。2022年にはアジアから初めて芸術監督が選出された。インドネシアのアート・コレクティブであるルアンプルパがアジアの視点を持ち込むキュレーションを行った。写真はドクメンタ 15での展覧会場の様子。)

\*\*\*\*\*

畠山「英語教育分野でも『異文化』の学びが西洋に閉ざされてしまわないような工夫が求められていますが、難しい面もあります。アーティスト活動はいかがでしょうか？その自由度の高さから、教育学、社会学、演劇教育の分野等でも期待されていると聞きました。」

東方「特に私が専門にしている現代美術のアーティスト活動は、一般の人には『なにをやっているのかよくわからない』と言われることもあります。一方、そういった定型の無さが自由度の高さだと思います。medeiaの複数形のmediumという言葉は『媒介』を意味し、美術用語ではもともと絵の具に含まれる接着成分を指すのですが、そこから発展して、今ではアーティスト自身が『メディウム』として機能し、人と人の橋渡しをしたり、別の分野同士を結びつけたり、難しい問題の入り口として機能したりするという考え方があります。」



(八戸工業大学感性デザイン学部のミッションは、アーティストやデザイナーを育成するのみでなく、アート思考やデザイン思考を備えた社会人の育成を目指している。写真は八戸市美術館での対話型鑑賞ワークショップの様子。)

\*\*\*\*\*

畠山「東方先生のアーティスト活動として、ベトナムのフエにおける取り組みがありました。滞在期間とコロナ禍が重なり、大変だったのではないのでしょうか？」

東方「滞在中は、人と会ったり、一緒に活動したりすることがすべて制限されて大変でした。プロジェクトが思うように進みませんでした。それ以前に入国までも大変でした。予定していた入国時期が大幅に後ろ倒しになった他、首都のハノイに入国して二週間の隔離生活後、飛行機でフエに移動してすぐまた二週間の隔離が繰り返されました。社会主義国ということもあって、国の決めたルールや監視がとても厳しかった印象があります。ビザ申請なども苦労しました。手続きや条件などは国や時期によっても違うので、ウィズコロナ時代の留学は、行きたい国について、その時の状況をきちんと調べる必要があると思います。」



(ベトナムでは5Kの標語が掲げられて感染拡大防止に努めるよう呼びかけられていた。写真は街中に掲げられたポスター。)

\* \* \* \* \*

畠山「フエで言語活動はいかがでしたか、英語は使われていたのでしょうか？」

東方「私は英語と日本語で活動しました。それはベトナム語がわからないせいで、もちろん現地で主に使われていたのはベトナム語です。建物など、随所にフランス統治時代の影響も残っていましたが、フランス語はほぼ聞きませんでした。また、中国文化の影響も受けているので、古いお寺やお墓では漢字も見つけました。ベトナム人で漢字を理解している人には会いませんでしたが。

現地の美術大学でワークショップを行なったのですが、そのときは英語でやりとりしました。大学関係者は英語話者も多かったです。美術大学の学生はあまり英語が得意ではないようでした。大学のスタッフの方が私の英語をベトナム語へ通訳してくれました。リサーチの際には日本語を勉強している大学生に手伝ってもらったこともありました。

プロジェクトのなかで、現地で造形物を作りたくて、仏像やキリスト教関連の彫像を作っている造形屋さんを訪ねたときには英語も日本語も通じなかったので、スマートフォンの翻訳アプリでベトナム語を生成してやりとりしました。文法構造のせいか、日本語よりも英語からベトナム語へ翻訳する方が、精度が高かったです。」



（フエ美術大学で行ったワークショップでは、学生への説明をベトナム語に翻訳してもらった。写真は東京オリンピックメダルデザインワークショップの様子。）

\*\*\*\*\*

畠山「実際の異文化コミュニケーションの授業の実践として、滞在中、現地から遠隔で、東方先生にお話をさせていただいたことがありました。東方先生から見て学生たちの反応

はいかがでしたか？」

東方「ベトナムにもともと興味を持っていたとか知識があったという学生はほとんどいませんでした。けれども、学生のリアクションから、ベトナムという国が、思い入れというほどではないですが、少しは特別な国になっていっているような印象を受けました。授業で取り上げられるという偶然によって未知の国と学生とのあいだに接点ができることが面白いと思いました。今は何でもウェブで検索することができますが、もともと興味も知識もないものを検索することはありません。大学では学生が興味関心のある授業を選んで履修するということになっていますが、全く知らなかったものとの接点を築くということも教育の重要な側面の一つだと思いました。

授業では、現地の写真や映像を見せながら、学生たちがなるべく多く質問できるようにしました。すると、ベトナムの食べ物や、オートバイなどの交通機関、大学の授業や若者の生活など、彼らの日常とつながることに対する質問が目立ちました。能動的に知りたいという気持ちを入り口にすることが学びや異文化理解にも重要だと思います。質問に対するフィードバックの際には、日本の状況と比較したり、それにまつわる社会や歴史の背景を一緒に話すようにしました。例えば、早朝の出勤前など、ベトナムのカフェにはたくさんの人たちが集まってコーヒーを飲む光景が見られるのですが、カフェ文化やコーヒーもフランス統治時代に持ち込まれたことを思い返すと、歴史とつながっているとわかります。知識を教えるというよりは物の見方や考え方を例示するつもりで、学びに対する主体性や能動性につながってほしいと考えて授業をしました。」



（前ページの写真はフランスパンにパテや香草を挟んだベトナム風サンドウィッチの  
バインミー。路上で購入したバインミーをカフェに持ち込んで朝食をとった。）

畠山「まとめとして、本シンポのテーマの一つ、『主体性』について、このような実践  
の機会をより多く設けることができれば、異文化を知りたいという興味関心を自分で満  
たすことができる主体的な学びの実現に確かに近づけると思いました。本日はありがと  
うございました。」